

【優秀賞】

タイトル：ぼくの「あーたん」

生徒氏名：岩村洋海

「今日の予定は何？」

ぼくが遊びに行くと、祖母は必ず聞いてくる。デパートのない町で暮らすぼくのことを可哀想と思っているのか、行きたいと言う場所に一日中連れて行ってくれるのだ。でも、祖母だって服やバッグを見て楽しんでいる。

今年七十一歳の祖母は、流行に敏感でおしゃれにはとても気を遣う。音楽も好きでぼくの知らない最近の曲を知っていたりする。それに「おばあちゃん」と呼ばれることも嫌いで、ぼくたち孫は「あーたん」と呼んでいるのだ。

そんな若々しく元気な祖母も、実はある病気を抱えている。それは難病と呼ばれるものだ。原因が明確でなく、治療法もわからない、それが難病だ。ぼくは知らなかったのだが、五十二歳のときにこの病気になった。祖母の病気は全身性の症状が出るもので初めのうちは辛く苦しい日々が何ヶ月も続いたという。それまでやっていた仕事もやめなくてはならず、今でも布団から起き上がれない日があるそうだ。

しかし、ぼくは祖母が弱音を吐いたり、苦しい表情をしたりするのを見たことがない。ぼくたちをデパートに連れ歩いているときも辛いはずなのに…。

今、日本中には多くの難病患者がいる。祖母も含めて、彼らが困っていることの一つに就職の問題がある。

彼らは難病を理由に就職を断られることが少なくない。また、たとえ就職できたとしても一日の中で体調の好不調の波があり、長い時間働くことができない人もいるそうだ。それに、見た目は健康な人と変わらず、彼らの症状を判断することは難しい。体調が優れず仕事ができないしていると「怠けている」と周りから見られることもある。そんな周囲の理解が得られない中で負けずに仕事を全うする人もたくさんいる。そういう方々がいることを知って、ぼく自身もっと強くならなければという気持ちが一層強くなる。

毎年十二月、難病を持った方々やその家族が集まりパーティが開かれている。ぼくも毎年のように参加しているが、その度に驚かされることがある。それはパーティに集まった人たちが全員笑顔でいるということだ。普通なら「なぜ自分だけ…」とふさぎこんでしまふところだが、そこにいた人たちはにぎやかに食事をしたり音楽に合わせて踊ったりととても楽しそうに見えた。そしてこのパーティで祖母は挨拶をしていた。祖母は「難病連旭川支部」の支部長だったのだ。

祖母は自分が難病になったあと、気持ちを切り替え難病連というグループに入った。そして今では難病を持つ方々の中心となって活躍している。「病は心の友として。」この言葉を大切にして様々な活動に取り組んでいるそうだ。自分も辛いはずなのに明るい気持ちを忘れず人のために働くなんで、ぼくにはなかなか考えられないことだ。

ぼくは祖母や難病を持つ方々から学んだことがある。それは「自分を受け入れ前向きに考えることの大切さ」だ。難病がもたらす痛み、不安や悩みは、そう簡単に消えるものではないだろう。しかし、そこで立ち止まらず病を抱えながらも、前向きに一步踏み出したからこそ今の生活を楽しく過ごせているのではないだろうか。

ぼくは今、中学三年生。悩みがないわけではない。高校受験に対する心配もある。彼らの持つ不安に比べれば、それはとても小さいものだ。だが、どんなことも前向きに「絶対に大丈夫」と考えることで悩みや不安は消え自信が出てきた気がする。

人はそれぞれ不安や悩みの内容・深刻さは異なるがそれを自分自身で受け入れてどう考えていくかという部分が重要だとぼくは思う。みんなが多かれ少なかれ抱えている人生の荷物。大切なのはその荷物をいかに背負うかだ。どんな荷物も背負い方次第で軽くも重くもなるのだから。

祖母はぼくに大切なことを教えてくれた。祖母には本当に感謝しているし、難病連で活躍している祖母を心から尊敬している。

でも、やっぱりぼくの大好きな祖母。

「ありがとう、おばあちゃん。いや、あーたん。いつまでも元気でいてね。」